

目的 被服のデザインを考える時、被服が生活という生の現実にはどうかとわっているかを理解することが重要であるという認識のもと、フィールド・ワークを続けているが、今回は前回発表したカ1・2報をふまえ、祁村において主要な被服が自給自足、及び、自家縫製時代(主に大正時代よりカ2次大戦前まで)に視点を置き、生活の仕方とのかとわりのありにおいて検討しようとするものである。

方法 前回の野外踏査に基き、昭和53年7月24日～8月1日の期間、面接調査、実態観察を、対象を60～80才の女性を中心に行った。

結果 日常の生活に深いかとわりをもつ被服類は木綿素材によるものであるが、主な自給自足の過程は、機織り・縫製の製作過程の後、収納・管理・着装の循環系に至り、雨利用・廃棄の経過をたどる。また、被服の種類はハレ着・ヨソユキ・ケウト着(チョイト着)、フダン着・ノラ着(ソト着)に分けられ、これらは着装時のT・P・Oの使い分けの他に、雨利用、廃棄の仕方にまで、ある種の秩序づけがなされていることが観察できた。即ち、ハレ着・ヨソユキは主として形見分けに、ケウト着、フダン着は衣類、履物等への更生後、ボロに、ノラ着は補修の過程に至りやほり最後はボロとして様々な生活側面に有用な生活資料となり活用されていた。このような実態から、自給自足という生産から消費に至る一連の生活技術より会得された木綿に対する認識が、被服素材としてのみにとどまらず、他の生活資料へと幅広い機能性を展開させることのできた、一つの要因と解釈することが出来る。